

提 言

目をそらすことの功罪

上別府 圭子 (東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻教授)

小児看護の分野では、検査や処置や治療の前や最中や事後にも、プレパレーション（心理的準備）といって、さまざまな方法で年齢相応の理解を促進し、子どもたちが主体的にそれらを受けられるように支援するケアが行われている。その中に distraction（気をそらす）という方法があって、特に小さい子どもの場合に、動くものを見せたり面白い歌を歌ったりして、子どもが気をそらしている間に、計測やら処置やらをさっとやってしまう。子どもを不安や痛みに晒す時間の短縮になる。直面（直視）すると不安や痛みが高じるので、気（目）をそらすことでより容易に乗り越えられることを利用したプレパレーションである。もう少し大きくなると、この原理を意識的に活用するコーピングを使うことがある。注射のときに、空いている手で腿をつねったり、おまじないを唱えたりするのもその一法である。



ありのままではあまりにも不安が高くなりすぎて自分が保てなくなってしまうために、自分を守るために使う無意識のコーピングを、フロイトの末娘アンナ・フロイトは防衛機制として整理した。大切な対象を喪失したり傷つけてしまったりしたときに生じる耐え難い抑うつや不安から自分を守るために用いる防衛機制を、メラニー・クラインは躁的防衛と名付けた。エンド・ステージの子どもの臨床で、子ども自身が明日の学校の準備をしたり、親が良い兆候だけを見たりしているときには、この防衛を使っている。私たちは、耐え難いほどの苦悩と防衛機制を理解したうえで、ケアを続ける。そんな子どもからふと、「僕、死ぬの？」と声をかけられたとき、私たちは動揺してしまうけれども、そのときこそ時間をとって子どもの思いに耳を傾けるときだ。大人側、専門職側、医療者側の不安のために、聞かなかったことにしては決していけない。

私たちが辿ってきた小児保健関連の歴史の中でも、医療者を含めた大人たちが目をそらしたり聞かなかったことにしてしまったりしたために、子どもたちや家族の苦悩を放置してしまった歴史が、残念ながらたくさんある。児童虐待問題が代表格と言えるかも知れない。私自身、その昔、勤務を始めた病院で、「子育てに困難を抱えているママたちのグループを始めたい」と言って企画書をあげたときに、責任ある立場の小児科医師から「この病院には、そのような家族はいませんよ」と言われ、理解者だった精神科医師からも「もう少し待ったほうがよい」と説得されて、企画を引っ込めた経験がある。児童虐待の防止等に関する法律の制定以前であったから、そういったことはそこそこあったのだろう。

「教育委員会から『いじめはなかった』という報告書が提出された」、「学校がリストカットの抜き打ち検査を始める」というニュースが流れている。私たち一人ひとりが、子どもたちの苦悩のサインに目を開き、悲痛な声に耳を傾けなければいけないし、そこに大人社会のシステム上の問題があったとしても、声を上げる勇気をもたなくてはならない。